

対象関係論の存在論的基礎付けによるケースワーク及び
地域福祉の実践理論のための素描(中盤)

佐野 治

東北公益文科大学総合研究論集第30号 抜刷

2016年7月20日発行

対象関係論の存在論的基礎付けによるケースワーク及び 地域福祉の実践理論のための素描(中盤)

佐野 治

I 序

1. 地域福祉実践の方向性

現在、我が国では、2025年の実現をめどに、「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築（厚生労働省）」を推進している。このなかで、「高齢者介護の問題と限定するような考え方から脱却することがまず重要」と警告し、「障害者や児童を含め、すべての住民にとっての仕組み」であることも報告されている。

また、地域福祉の推進については、2000年の社会福祉法により、「地域福祉の推進（第10章）」が法律上明文化され、2002年には地域福祉推進（地域福祉計画策定）のための指針として、「生活の拠点である地域に根ざして助け合い、生活者としてそれぞれの地域で誰もがその人らしい安心で充実した暮らしができるような地域社会を基盤とした福祉（地域福祉）の推進」の必要性が述べられた（社会保障審議会福祉部会）。そこでは、地域福祉推進の背景として、「生活不安とストレスが増大し、自殺やホームレス、家庭内暴力、虐待、ひきこもりなど」の「新たな社会問題」の台頭が指摘されている。

このような地域福祉の推進のための専門的な実践方法として、英国でコミュニティソーシャルワーク（バークレイ報告、1982）が提案された。「カウンセリング」と社会的ケアプランを統合的に一人のワーカーが行うという方法である。

近年の地域福祉推進の方向性に沿って、福祉専門職の支援方法としての「コ

「コミュニティソーシャルワーク」を用い、「住み慣れた地域のなかで、すべての人が、互いに助け合い、自立して自分らしく、安心で充実した暮らしが、自己決定・自己選択によって、人生の最後まで、(生活)できるよう、文化を尊重して個人、家族、地域、を支援していくこと」(筆者)が求められている。

本稿(中盤)の目的は、前半でも示したように、Boss, M. の現存在分析論の人間理解を受け継ぎ、Heidegger, M. の存在論によって、ケースワーク及び地域福祉実践の理論、対象関係論の基礎付けの全体像を素描することである。

2. 問題意識2—福祉教育の観点から—(問題意識1は前半を参照)

筆者は大学教育に携わって二十数年になる。以前にも多少論じたことがあるが、福祉系大学への期待は、学年があがるごとに、自覚的か無自覚的にか「失望やあきらめ」に変わることが少なくない。特に高校生(入学前)の時点においては、福祉領域の学習とは、高齢者(認知症等)、障害者(精神障害者等)、児童(虐待等)への「心のケア」の知識・技術の取得を期待している。しかし、入学すると「心理学」が一教科(それも臨床心理学はほんの一部)、社会福祉学は福祉政策と福祉制度等の「政治学、経済学等の一部や表層」、その他の各論(高齢者福祉論、障害者福祉論、児童福祉論)は、「法律や制度ばかり」、相談援助演習では「理論的ではない事例研究やディスカッション」、また実習や現場では、ソーシャルワーカーあるいは相談員といわれる人は、「基本、オフィスワーク」で、「いつケースワークしているのか見たことがない(医師の診察の時間と同じように、ケースワークの時間がなければおかしいのではないか?)」、「アプローチはまるで使っていないし、そもそも知らない」、「相談員になりたいなら、まずは介護業務からと言われる(看護業務を積まなければ、医師になれないのか?)」なのである。

いずれにしても、大学入学前の期待とは大きく齟齬があることは確かそうである。これらの「齟齬、期待はずれ、失望やあきらめ」は、高校生の問題なのか、大学の問題なのか、あるいは厚労省指定のカリキュラムの問題なのか、また現場の問題なのか、社会福祉士制度の問題なのか、さらには学問自体の問題なのか、である(これらは学生個人と社会環境の交互作用)。確かなことは、

入学を希望する高校生等（福祉教育利用者）の「ニーズ」に応え切れていないことである。さらに、学生も教員もともに社会福祉分野に興味や関心があっても、専門教育内容（カリキュラム）に魅力がない、つまり「つまらない」、「おもしろくない」のではないか。これらは「学生から声があがらない、あげられない」ため、改善されていないようにも見える。教員側から見たとき、医学モデル（診断主義等）から生活モデル（システム理論や生態学）へと援助理論がシフトしてますます「実感のない」、「つまらないもの」になっていったように思われる。基礎理論であるシステム理論や生態学理論（本来これらの理論だけで何十時間も必要）も表層的にしか教えないのであれば、専門教育的な基礎理論（土台）が非常に脆弱となってしまう（学生側からみても、基礎理論理解への自信も付かないように思う）。特に調査しているわけではないが、大学4年生に対し「社会福祉士となるための専門教育を受けて、確かな専門的知識や技術が身についた感があるか」と尋ねてみたい。介護福祉士教育を受けた学生とは違った結果が出るような気がしている。

筆者は、学生に対して、社会資源活用のための法律、制度や政策を学びつつも、介護福祉士教育（介護の知識と介護技術）のように「手に職を付ける」的発想で、「心のケア」もできる専門家になれるよう推奨していきたいと思う。精神分析理論の上に診断主義ケースワーク、システム理論や生態学理論等の上に、エコロジカルアプローチという援助理論がのってくるように、本稿では、Heideggerの存在論の上に「対象関係論」をのせて試論することを意図している。対象関係論が持っている仮説自体が、Heidegger存在論との「親和性や類似性」を持ち合わせていることに基礎を置いて考察している。その仮説と存在論双方の解釈の豊かさからも福祉教育的観点においても「魅力」を備えている点において、有用性を高く感じている。

Ⅱ ケースワーク及び地域福祉の実践理論のための試論

「住み慣れた地域のなかで、すべての人が、互いに助け合い、自立し、自分らしく、安心で充実した暮らしが、自己決定・自己選択によって、人生の最後

まで、(生活) できるよう、文化を尊重して個人、家族、地域を、支援していくこと」において、(1)「住み慣れた地域のなかで」に「環境世界」、(2)「すべての人が、互いに助け合い」に「相互存在」、(3)「自立し、自分らしく」に「自由存在」、(4)「安心して充実した暮らしが」に「頽落」、(5)「自己決定・自己選択によって」に「覚悟性」、(6)「人生の最後まで」に「死のなかへの先駆」、(7)「(生活) できるよう」に「内=存在」、(8)「文化を尊重して個人、家族、地域を、支援していく」に「共同運命として相互存在を自由へ開放する」を位置づけ、対応させた。

Heidegger 存在論は、率先して相手を解放する（あるいは自由にする）待遇について多くを論じていない。そのため、他者支援のための理論として、存在論的に、基礎付けした対象関係論を乗せて試論する。

以下、【試論の位置づけと概要】には、Heidegger 存在論を地域福祉の実践理論として試論する場合の位置づけと概要、【支援の方向性】には、試論を実践する場合の留意事項を記した。また、ここで言う「支援」とは、「実存的な存在可能において相手に率先」(SZ 上 267) し、相手が「その関心において透視的になり、それへむかって自由になるのを助ける」(SZ 上 268) ことを意味している。

1. 地域福祉の存在論的試論

(1) 「住み慣れた地域のなか」(環境世界)

【試論の位置づけと概要】

「住み慣れた地域のなか」で暮らすとは、住み慣れた家、土地、使い慣れた物、見慣れた人（家族、友人、知人）に囲まれて生活することである。これを対象的にみれば、ある地域の「なか」で、人が物を使って、また人と人が交流して行動していることになる。しかし、現存在は、内=存在として「ある物体的な事物〈人体〉が、ある客体的存在者の〈なか〉に客体的に存在」(SZ 上 133) していることではない。現存在（人間）には、「本質上、世界=内=存在がぞくしており、それが世界へかかわる存在が、本質上、配慮」(SZ 上 139)

である。日常的な現存在は、いつもすでに配慮的交渉という在り方で存在している。交渉は、個々の道具よりも先にある道具立ての全体性を発見し、多様な指示関係に従う配視にひかれ、「配慮のなかに融け込み、様々な明確度や配視的視野の広さ」(SZ上167)において、内世界的存在者にたずさわっている。なかでも用具的存在者(道具)は目立つことなく、使用不可能性は発見されていない。このなかにおいて、「家庭の世界、公開的世界、環境的自然」が発見され、誰でも接することができるようになっている。

環境世界における空間(地域のなか)においても、用具的存在者をもとに展開される。用具的存在者は、ある一定の方向に存在するが、その「用具的な道具連関が所属しうる所在」(SZ上245)である方面である。そして「方面的な空間的趣向性」が属している。それをもとにして、「用具的存在者を遠近や見当において見つけたり規定」(SZ上245)したりする。現存在はその空間性に即して、「まず〈ここ〉に居るのではなく、〈あそこ〉に居るのであり、その〈あそこ〉から自分の〈ここ〉へ」戻って来る。自分の配慮的存在は、「あそこにそなわっている存在者をもとにして解意」される(SZ上239)。つまり、道具を配慮的に近づけたり、遠ざけたりしている。道具が目立たないことにおいて、道具はもっとも遠くにあり、道具の使用が向かっているところを近づけている。これらの環境世界こそが、住み慣れた地域なのである。

【支援の方向性】

○住み慣れているとは、使い慣れたもの、見慣れたもの、行き慣れた場所、住み慣れた地域の中で暮らしていることである。その道具連関のなかで、「環境世界が通示されないよう」に支援することが必要である。

○高齢者等が、自宅を離れて病院や施設に入所するなどの環境変化は、使用不可能性が多く発見され、住み慣れた地域のなかで暮らしていたときの用具性を喪失し、現存在や用具的存在者の客体性の発見とともに、「目立たしさ、催促がましさ、煩わしさあるいは邪魔なもの」に迫られることが多くなる。支援において、「〈生きとし生けるものの営み〉としての自然、われわれを畏怖させる自然、風光としてわれわれの心をとらえる自然には、接すること」(SZ上166)ができなくなってしまうことに留意する。

○支援者は、利用者が「あそこ」から自分を解意することができず、自己を先導する存在了解の既成的解意が変様、偏向、転化を被ってしまい、豊かに頹落できなくなる可能性を持つことに理解を要する。

(2)「すべての人が、互いに助け合い」(相互存在)

【試論の位置づけと概要】

「彼らは、配慮的＝配視的な現存在がその内に本質上身をおいている世界のなかから出会う」(SZ上261)といわれている。配視的配慮における用具的存在者と「一緒にほかの人びとの共同現存在が居合わせて」おり、「世界の内部にある用具的なもののなかから姿」を現す(SZ上270)。ほかの人びとの共同現存在も現存在同様存在者であるが、用具的存在者にかかわり合う配慮ではないことから、待遇といわれている。身近な環境世界において、「配慮されているものごとにおいて、ほかの人びとは「そのありのままの姿」(SZ上275)で居合わせているが、疎隔性、平均性、均等化、存在免責という存在様相(公開性の構成)にある(SZ上276)。

「各自の現存在も、ほかの人びとの共同現存在も、さしあたってたいていは、環境のなかで配慮されている共同世界のなかから出会う。現存在は、このように配慮された世界に融けこみ、すなわち、とりもなおさず、ほかの人びととの共同存在に融けこんでいて、自己自身」(SZ上262)ではなく、世間(das Man)である。現存在の自己は「世間的＝自己」として、「平均的に発見されている共同世界の内に存在」(SZ上282)し、世間という在り方をしているほかの人びとであり、これは自ら選び取られた「本来的自己」としてではない。これらの相互存在の「無関心的様態は、ともすれば存在論的解釈を迷わして、この存在を、いつくかの主体のたんなる客体的存在」(SZ上265)と把握する解釈へ陥ってしまう。

【支援の方向性】

○日常的には、各自の現存在、ほかの人びとの共同現存在も、共同存在として、無関心、疎隔性、平均性、均等化、存在免責という存在様相にあり、共同現存

在が、客体的存在として把握され、事物として現前する恐れがある。用具的存在者の客体化、対象化、事物化とは違い、人権に関わる問題も起きる可能性があることに注意を要する。

○すべての人は、共同存在に融けこんでいて、彼らの環境的配慮的な世界＝内＝存在のなかで、用具的存在者から姿を現すが、さしあたって、「〈かれらの間〉での存在において、彼らは共同に現存」している。「彼らの共同現存在は、無関心や疎遠という状態で出会っている」(SZ上265) ことが、本質的構造であることから、互いに知り合うことが本質的に必要である。

○現存在は共同存在として、「本質上、ほかの人びとを主旨として〈存在〉」(SZ上266) している、ため、本質的に「誰かが存在するため」に存在している。

○世間は「世界と世界＝内＝存在についての身近かな解釈の下描き」(SZ上282) があたえられており、現存在が「それを主旨として日常的に存在しているところの世間的＝自己は、有意義性の指示連関」(SZ上282) を分節しているため、人が考えることを考え、することをするなど固有の自己を喪失している。「自分の自己という意味での〈私〉」(SZ上282)、つまり本来的自己を取り戻す支援が必要になる。

○世間的＝自己から脱却し、本来的自己を取り戻すための第一歩として、「本当の意味で〈配慮〉すべきこととしてあらためて彼に返還してやる」(SZ上267) ことが求められる。配慮において、在宅サービスなどを無自覚的に利用することで、途中で割り込んで、自分でできること、しなければならないことを相手に代わってやってしまうことで自立は阻害され、相手はそれによって支配され、依存的になってしまう。自立を促すとは、「相手の本来的な関心事、すなわち彼の実存にかかわるものであって、相手が配慮するものごとにかかわるのではないから、彼がその関心において透視的になり、それへ向かって自由になるのを助ける」(SZ上267-268) ことである。

(3) 「自立して、自分らしく」(自由存在)

【試論の位置づけと概要】

現存在の存立は、自己の自立性にもとづくもので、自我や主体へ還元される

ことはないが、当面は「非自立性へ事実的に頹落」(SZ上206)している。現存在は、世界=内=存在としておのれ自身にかかわらせている存在者であるが、大抵、おのれ自身から脱落し、「さしあたってすがりついている内世界的存在者」に頹落し、おのれ自身として存在していない。しかしまた、「本来性が非本来性、もしくは両者の様態的無差別かへむかって開かれている自由」(SZ下024)もある。「この存在そのものが自由によって規定されているために、現存在はおのれの可能性へむかって非本意的」(SZ上407)に関わることもできる。他の存在者に依存し、支持を求めることもなく、自己自身として存在することの可能性へ臨ませるための現象が「不安」である。不安が現存在を孤独化させ、現存在を頹落(世間的=自己)から連れもどす。「孤独化された存在可能へ臨ませる肅然とした不安には、この可能性に際会する毅然とした喜び」がある。このなかで現存在は、「せわしない好奇心」や「むなしい可能性」、「世間の出来事から仕入れてくる慰戯の〈偶然性〉」から解放されるのである(SZ下182)。そして、「現存在がはじめから存在してきた可能性としてのおのれの存在の本来性へむかって開かれているという、おのれの自由存在」(SZ上396)に直面する。「人間の perfectio (完成) - すなわち、人間がその投企において(ひとごとでない自己の可能性へむかって開かれている彼の自由存在において)存在しうるもの」へと成っていくことができるのである(SZ上418)。

【支援の方向性】

○「自立して、自分らしく」という意味は、通常の意味(自己実現)とは異なる。日常的現存在は、頹落しているため、自分自身から脱落し、非本来的である。本来のか非本来的にあるかは、各自の現存在の自由にまかせられているが、大抵は、非本来的在り方で存在しているということを理解する必要がある。

○自分らしく存在するために、希有の現象である不安により、孤独化され、むなしい世間的=自己から脱出することであり、そのなかに喜びを見つけていくことを支援していくことである。

○自己が存在しうる本来的な可能性に向かって、自由存在として投企するための支援を必要とする。

○相互存在として頹落している場合、現存在は、まず世間的=自己から連れも

どされ、孤独化された存在可能へ臨まなければならない。存在可能において、自立して、自分らしくなることを、率先していくことが求められる。他の人に依存することなく、おのれ自身によってのみ存在する可能性に向かって自由になることが支援の目的である。

(4)「安心で充実した暮らしが」(頽落)

【試論の位置づけと概要】

現存在は、日常的に、頽落において自己から逸脱して生活しており、非本来性の様態にある。これも、了解的=心境的な世界=内=存在の可能存在であるがゆえに、頽落しうるのであり、おのれ自身に直面して、世間のなかへ逃亡することによって動機付けられている。

頽落は、現存在の存在の日常的な根本の様相で、世間話、好奇心、曖昧さによって、相互存在のなかへ埋没している。頽落する世界=内=存在は、現存在を世間へ引きずりこみ、むしろとめどない事業活動へ駆り立てる。「めまぐるしく移り替わる新奇と変化による活動と興奮を求めるその落ちつきのなさにおいて、好奇心はたえず気ばらし (Zerstreuung) の機会を工夫」する。「なにごとつつみ隠しておくことのない好奇心と、なにごととも理解せずにいない世間話とは、これこそ本物の<生き生きとした生活>だという保証を互いに与え合い、すなわちそのありさまで存在している現存在に与える」のである (SZ 上 367-368)。

また、現存在の頽落は、存在了解が「客体性」であると規定され、それが優勢で本質的な存在様相であると捉えられ世界現象から切り離されてしまうと、確実に存在するものとして、単なる内面」が見出され、それに対応する外界が存在し、その接合が図られる。解意に導かれた頽落的存在は、現存在の本来的な存在を覆い隠してしまうことになる (SZ 上 431)。

【支援の方向性】

○頽落はもともと「不安を隠し」、おのれ自身に直面しての逃避であった。支援においても、相互存在として「気晴らしさせ」、「忙しくさせる」方向に、

「新奇、変化、活動、興奮」を求めて動いていく。これは、存在が客体的存在であるとの了解にもとづき、世界現象から切り離されているためである。そして、それにかかわる対象的な内面（心理）に対して、心のケアも登場する。

○現存在の根源的な存在を打開するには、「頽落的な存在的＝存在論的解意傾向に逆行して奪い取られなくてはならない」（SZ下184）。真の意味での心のケアとは、世界現象に即して、本来的な存在を覆い隠している存在論的解意を打開するための「解釈」なのである。

（5）「自己決定・自己選択によって」（覚悟性）

【試論の位置づけと概要】

現存在が、世間へ埋没している場合、世間がいつも決定を下し、「本来的に自己であることの可能性」（自分らしさ）を選択する負担を現存在から奪っている。世間的＝自己を本来的な自己へ実存的に変容することにより、「怠っていた選択の取りかえし」をすることである。そして「おのれの自己にもとづいて、ある存在可能へ決断」し、「おのれの本来的存在可能をおのれのために可能」とすることが求められる（SZ下097）。そのためには、世間に紛れ込んでいる現存在自身を見つけ、その可能性が「現存在自身に示され」ていなくてはならない。それが良心であり、その呼び声である。それは自己の存在可能へ呼びかけ、「現存在をひとごとでない負い目ある存在」（SZ下099）へと呼び起こす。また、現存在は、投げられた存在者であると同時に、同根源的に了解によって諸々の可能性に自己を投企し、特に世間からの解釈を受け入れているため、「おのれの自己を聞きのがし」（SZ下102）、自己を喪失している。このような現存在に対し、呼びかけられるものが良心の呼び声であった。「呼びかけを了解」することが、「良心を持つとする意志」（SZ下139）である。「現存在のもっとも根源的な存在可能を、負い目ある存在として開示」（SZ下140）するのである。負い目とは、「ある〈ない〉によって規定されている存在の根拠」（SZ下129）で「ある無性の根拠存在（Grundsein einer Nichtigkeit）」（SZ下129）を意味する。「負い目ある存在はなんらかの過誤の結果としてはじめて生ずるものではなく、むしろその逆であって、過誤はある根源的な負い目ある存

在を〈根拠として〉はじめて可能になる」(SZ下130)のである。

【支援の方向性】

○日常的現存在は、自己の生き方を決め、選択することは、世間からの解釈を受け入れ、自己を喪失しているため、「おのれの自己を聞きのがしている」(SZ下102)と捉えることが最初である。

○おのれの自己の「可能性に向かって呼び出す声に了解的に応じ」、その呼び声の了解において、「おのれの実存可能性に聴従」する時、現存在は、「おのれ自身を選択」する。そのときに、「ある無性根拠存在」として「負い目ある存在」が開示される(SZ下138-139)。

○現存在は「みずからその根拠を築いたのではないけれども、その重みに支えられていて、その重たさが気分によって現存在に重荷としてあらわになる」(SZ上131)。この気分があらわにする「重荷」に耐えていくための支援が求められる。

○覚悟性こそ、共同存在するほかの人びとをひとつとでない彼ら自身の存在可能において存在させ、この存在可能を率先的＝解放的な待遇において共同開示するという可能性のなかへ引き入れ、ほかの人びとの「良心」となることもできるのである(SZ下159)。

(6)「人生の最後まで」(死のなかへの先駆)

【試論の位置づけと概要】

頽落という非本来的な存在だけでなく、現存在を本来的な存在として、その「全体存在」を捉えようとする場合、人間の死を考えざるをえない。「死は、死へ臨む実存的な存在」において存在する。死は現存在を世界＝内＝存在の終末として、終末に至る存在として規定される。死は、「ひとつとでない、係累のない可能性は、追い越すことのできない可能性として、自己自身を放棄することがおのれに差し迫ってきていること」(SZ下061)を現存在に了解させる。「死に臨む存在」として、あらゆる実存全般の不可能性という可能性へ向かう存在を「先駆」という。この先駆において自己の存在可能へ向かって投企する

場合、その存在不可能性においておのれを了解するのである。先駆において、「世間的＝自己の日常性への事實的自己喪失」としておのれが暴露される。死は「現存在を個別的現存在」として孤独化させ、不可能性において「無へ臨む自己」を見出す。不安は、「このような定めを負う存在者の存在可能を案じて」不安になる（SZ下091）。一方、死へ臨む存在は、「不安を臆病な恐怖心」（SZ下092）へとすり替えてしまう可能性もある。また、了解はいつでも心境的の了解であるため、気分は現存在を現に存在する被投性に直面させる。気分において、根源的な気分は不安という現象であった。不安を覚えるのは世界＝内＝存在そのものであり、世界そのものである。そこで内世界的存在者が無意義となり、世界が世界として開示される。不安は、頹落している現存在が、世間からおのれを了解する可能性を奪い、おのれ自身によってのみ存在する可能存在として開示される。自己ではない存在者（用具的なもの、共同現存在等）に関わり合うのではなく、おのれ自身である存在可能へと関わり合っていくことになる。この存在構造を「おのれに先立つ存在」という。現存在は、内世界的存在者のもとでの存在として、ある世界への投げられていることも属しているため、「存在者のもとで、ある世界の内に、すでに存在していることにおいておのれに先立つ」ことを意味する。これが現存在の存在としての「関心」である（SZ上404）。

【支援の方向性】

○他者の死に多く出会う現存在は、死を通俗的な理解だけでなく、終末として実存論的に捉えることが求められる。それは、切迫してくる死として、不安という根本的気分にも襲われる。支援者は、他者に対し、死に直面して頹落（逃避）することなく、自由におのれを解放（自己解放）することが率先的に必要となるのである。

○死について存在的、つまり「事物的肉体がなおも客体的に残存する」（SZ下036）、「絶命」、「死亡」等ではなく、存在論的に把握することを支援する。「〈人間が生まれでるやいなや、人間はすでに死ぬべき年齢に達して〉おり」（SZ下050）、死は「目前に差し迫っていること」（SZ下059）、「世界＝内＝存在」に属していることの自覚を促すことである。

○「死へ臨む不安を、死亡の恐れと混同」せず、また「〈死へ臨むひとごとでない存在〉」から逃亡せずに、根本的心境として、「現存在がおのれの終末へ臨む被投的存在として実存」していることを引き受けることを支援するのである(SZ下026)。

○死へ臨む存在として、「自己自身の放棄」を助け、「無へ臨む自己」としての不安現象へ導くことを支援するが、その場合、内世界的存在者は無意義となるため、用具や世間から自己を了解する手立てを失う。個別的現存在として不安のなかで、孤独化することを通して、おのれ自身である存在可能へ向かうことを支援するのである。

(7) 「(生活) できる」(内=存在そのもの)

【試論の位置づけと概要】

世界を「了解することにおいて、いつも内=存在も合わせて了解されており、実存そのものの了解は、いつもまた世界の了解」(SZ上317)である。そして、内=存在は、同根源的に、「気分」、「了解」、「話」という存在の仕方で開示される。

気分のなかで、現存在は、「ともかくもあり、そしてないわけにはいかない」、「とにかくある」、「どこからとどこへは暗闇に包まれて」(SZ上294)おり、その気分のなかで存在が開示されている。存在的=実存的に、その存在は徹頭徹尾、回避されている。おのれの現のなかに引き渡されている既成事実性(被投性)にあり、この事実が心境のなかで開示されるのである。被投性の心境において、おのれを見出すが、これは「逃亡から起こった発見」である。気分は「被投性へ眼を向けるというありさまで開示」するのではなく、それへの「去就として開示」する。また、気分は「外部からでも内面からでもなく、世界=内=存在そのものからやってくることから、世界=内=存在の全体を開示する。この開示が指向性(・・・へ視を向ける)を可能にする。心境は、世界と共同現存在と実存とを同根源的に開示する(SZ上298)。用具性の喪失により内世界的な存在者によって「迫られうる」のは、心境にもとづいている。「心境は、世界を、たとえば脅迫性を見越して、すでに開示」している。心境は「それ自

身、現存在がたえずおのれを〈世界〉へ引き渡し、〈世界〉からの迫りを受け、こうして、あるありさまでおのれ自身を回避する実存論的な存在様相」なのである（SZ上302）。

心境的な「了解」によって、被投性を了解し、また、おのれの存在可能を存在することで、おのれ自身の要所を開示する。了解は、「現存在の存在をその主旨、有意義性（世界の世界性）に向かって投企」し、おのれの可能性を探っている。了解の投企的性格により、世界＝内＝存在を存在可能の現として開示しているのである。現存在は、投企のありさまで、被投されている。了解の投企において、了解されている存在者の存在、配慮であれば「有意義性の指示連絡のなかに、おのれを定着」させている。現存在の存在によって、存在者が発見され、了解されるようになったとき、「意味」をもつ。意味は、「了解可能性がそのなかに身をおいているところ」であり、「了解的開示において分節される事柄」がそなわっている（SZ上327-328）。

話は、「解釈以前の了解内容に意味という仕切りをつけ、分節可能なものを見えるようにさせる解意」のことで、解釈に意義を与えている。例えば「配視が発見するということは、すでに了解されている〈世界〉が解意」（322）されているということである。意義を分節する話は、世界のなかで語られるために「言語」へと変わらざるをえない。つまり語られないこと、沈黙することによって、実存論的可能性は保たれる。

気分同様、了解（視）、話は、現存在の存在を開示するが、日常的な現存在においては、話は世間話、視は好奇心、解意は曖昧さへとその根源を喪失（頹落）して存在しているのである。

【支援の方向性】

○「世間話のうちに住みついている」現存在は「世界と共同現存在と内＝存在そのものへと原義的な根源的に真正な存在連絡から遮断」（SZ上362）され、「〈分かち合う〉」（SZ上360）ことなく、「〈世界〉のもとに、ほかの人びとと共に、おのれ自身にむかって」（SZ上362）存在している。相互存在は、「話された話を互いに話し合い配慮し合って」（SZ上359）おり、原初的關係から隔たっている。現存在と存在者との直接的な存在關係を取り戻す支援が求められる。

○「世界＝内＝存在としてのおのれの存在から逃れ、「めまぐるしく移り替わる新奇と変化による活動と興奮を求めるその落ちつきのなさにおいて、好奇心はたえず気ばらし（Zerstreuung）の機会」（SZ上367）を狙っている。そしてこれが充実した時間、「生き生きとした生活」（SZ上366-367）であると取り違えさせる。落ち着きのない、事業活動と興奮へと没入し、自己を見失わないように支援することが必要である。

○現存在の存在可能としての了解において、真に開示されているものが何であるかを曖昧にする。この曖昧さは、「ひとつの世界の内での投げられた相互存在そのもののなかに」（SZ上371）あり、いつも世間話と好奇心に紛れ、安心し、おのれの自己の存在可能性への投企をそらしている。常におのれ自身の存在が「何に懸けられているか」（SZ上313）を曖昧にさせない支援が必要である。

○生き生きとした事業活動、多忙さ、世間話、好奇心、曖昧さなどの相互存在に埋没して、非本来性の様態になっていることからの脱却が必要である。また、主観（援助者）と客観（利用者）という見方では、世界現象を素通りして、存在了解は発達しないどころか、支援そのものが危険なものになりかねないのである。

（８）「文化を尊重して個人、家族、地域を、支援していく」（共同運命として相互存在を自由へ開放する）

【試論の位置づけと概要】

「本質上その存在において将来的であって、それゆえにおのれの死へむかって自由に打ちひらかれ、死につきあたってくだけ、こうしておのれの事実に現へ投げかえされることのできる存在者、一すなわち、将来的でありつつ同根源的に既往的な存在者、かような存在者のみが、相続された可能性をおのれ自身へ伝承しつつ、おのれの被投性を引きうけ、そして〈自己の時代〉へむかって瞬視的に存在することができる。本来的であるとともに有限でもある時間性のみが、運命というようなことを、すなわち本来の歴史性を可能にするのである。、、、それへむかって自己を投企する実存的な存在可能を、伝承された現

存在了解のなかから表[・]立[・]つ[・]てとりだしてくる可能性は、現存在の時間性に含まれており、そしてただそこにも含まれているのである。この場合には、おのれへ帰来しておのれを伝承的に付託する覚悟性は、伝えられて来た実存可能性の反復となる。ここでいう反復とは、明[・]ら[・]か[・]に自[・]覚[・]を[・]も[・]つ[・]てお[・]こ[・]な[・]わ[・]れ[・]る[・]伝[・]承[・]の[・]こ[・]と[・]で[・]あ[・]る[・]。それはかつて現存していた現存在のもろもろの可能性のなかへ還帰することを意味する」(SZ下326-327)。

現存在の存在は、形式的に「世界の内部で出会う存在者のもとでの存在として、世界の内での内=存在としてすでに、おのれに先立って存在する」という、分節されてはいるものの根源的な構造全体は「関心」であった。関心を関心として可能にするもの、存在の意味が時間性である。時間性は、自らを時熟させ、その様態は、それぞれの脱自態から規定される。現存在は、おのれの実存において、本来的か非本来的にかが開示され、おのれを了解している。

現存在の本来的な全体存在(死へ臨む先駆的覚悟性)を可能にするものは、現存在が、ひとごとでない可能性において、もともとのおのれへ向來することを迎えること(将来)ができるからである。その先駆的覚悟性において、将来的現存在は負い目ある存在においておのれを了解する(引き受ける)のであった。この引き受けは、無性の被投的根拠として存在することを了解することでもある。被投性を引き受ける(了解する)ことができるということは、「そのつどすでに存在していたありさまで」(本来的に存在する)ひとごとでない自己の存在を、つまりおのれの既往を存在する(了解的に帰り来る)ことができるということである(心境のなかでおのれの被投的事実を見出す)。「本来的に将来的であることによって、現存在は本来的に既往的に存在する。既往性は、あるありさまで、将来から発源」する(SZ下213)。この場合、そのつどの現の状況が開示され、現存在は、「環境世界に臨在しているものごと」(存在者を現時する)へと行動する。「現時という意味での現在」において、覚悟性は本領を発揮し、「みずから行動的にとらえるものごとを歪めずに、それに対処する」(SZ下213)ことができる。このような形で既往しつつある将来(向來の迎え)、将来と既往性のうちにある現在としての瞬間、これらの統一現象を時間性という(実存性の第一義的意味)。これら「脱自的時間性が、現を根源的に明」(SZ下262)けるのである。本来的時間性は上記のように本来的な将来から、非本

来性においては、将来の時熟の転化が起り、現時的予期として時熟する。一方、現存在の非本来的了解は、日常的な配慮できるものに向かっておのれを投企し、配慮されるものへおのれを向來させ、世間的＝自己として配慮的におのれを予期し、了解している。開示一般の時間性において、開示態は、日常的な存在様相として、世間の頽落的な非本来的に自己解意にとどまっている。配慮的に従事するなかで、配慮されているものごとをもとに、おのれを予期している（非本来的将来）。予期によって期待することが成立する。死へ臨む存在である先駆ではなく、「死を配慮する期待」である。頽落は現時（非本来的現在）のうちに実存論の意味をもっている。非本来的了解によって「投企される存在可能は、配慮されるものごとをもとに投企」されるが、瞬間は「本来的将来から時熟」する（SZ下238）。

【支援の方向性】

○現存在の存在が歴史的であるからこそ、「過去への道が開かれて」（SZ下342）いる。それは「脱自的＝地平的時間性にもとづいて」（SZ下342）いる。通常「過去のとよぶものは、もはや客体的に存在していない存在者のこと」（SZ下217）であり、「誕生とはもはや〈現存しない〉という意味での過去のもの」ではない。現存在は、「誕生せるものとして実存しており、また誕生せるものとしてすでに－〈死へ臨む存在〉という意味で－死に至っている」（SZ下307）のである。過去のもは「当時の出来事にぞくしていたものである。それにもかかわらず、それが〈今〉なお存在している」（SZ下13）のである。過去は「過ぎ去ったものという意味」ではなく、「過去からの由來」を意味する場合、「なんらかの生成の連関のなか」（SZ下14）にあり、「配慮的な世界＝内＝存在的な現存在によって使用されていたところの、その世界が〈過ぎ去った〉」のである。この世界は、もはやない。しかし、かつてその世界の内部に属していたものは、いまなお存在している。いまなお存在しているものも、かの世界に所属していたものとして、その現在の存在にかかわらず〈過去〉に属することができ。よって、現存在の実存可能性を了解するために、「世界＝歴史的なものとして存在してきたかを捉える必要がある。

○「自分ながら見分けられなくなった〈過去〉の遺物を背負って、現代的なも

のを追求」するのではなく、「本来の歴史性は、歴史を可能的なものの〈再帰〉として了解しており、そして、実存が覚悟の反復のなかで可能性へむかって運命的＝瞬視的にうちひらかれる」ことを支援する（SZ下339）のである。

2. 対象関係論 (Klein, M) と現存在分析論 (Heidegger, M) との共通性

(1) 「死の本能（破壊衝動）・不安」と「無意義性・不安」

Kleinにおける不安は、死の本能（破壊衝動）から生じ、絶滅の恐怖（不安）となるものである。「身体的欲求の挫折」による破壊衝動による不安によって、自我（や対象）を細分化させてしまう（著作集4,8）。一方、Heideggerは、不安により「世界の無意義性を開示」し、「配慮可能なものごとの無性」（SZ下247）をあらわにし、「内世界的存在者がそれ自体としてまったく意味を失」うという（SZ上394）。つまり、不安（絶滅恐怖）による存在者（自我や対象）の細分化は、Heideggerでいうところの世界の無意義性の開示にともなう配慮可能なものごとの無性化、内世界的存在者の無意味化の段階的様子を示しているのではないだろうか。細分化とは、存在者の無性化、無意味化であり、突然無性、無意味になるわけではない。不安によって孤独化し、段階的に無意味化するなかで、細分化されているように把握されるということである。それと同時に、「無意義性を背景にして」、「なおも身に迫ってくる」（SZ上394）ものの基礎が、迫害恐怖を生み出している。

生の最も早い時期の子どもにとって、内世界的存在者の明確度、配視的視野が狭く、授乳という母親への世界＝内＝存在への没入度、世界への依存度が高いために、欲求の挫折により、世界から、おのれを既成解釈から了解できず、まれにしか起こらない不安現象が生じていると考えられる。不安は、「頹落しつつ〈世界〉と公開的な既成解釈からおのれを了解する可能性」を、現存在から奪い、「孤独化において孤独化されたものとしての現存在がひとえにおのれ自身によってのみ存在することのできる可能存在」として開示する（SZ上396）。

Kleinにおいても、「内的対象が同様の破壊の危険にさらされているように感

じられる。その結果が極端な自我の脆弱化であり、自我を支えるものは何もないという感情であり、孤独に対応する感情」(著作集4,18)を示し、おのれをささえるものの喪失(無意義化)、そしてその心境である孤独を言い表している。

(2) 「良い・悪い乳房(母親)」と「世界適合性」

Kleinによれば、身体的欲求の充足と身体的欲求の挫折により、その最初の対象が、子どもにとって良い(満足を与える) (good 〈gratifying〉) 乳房と、悪い(欲求不満をひきおこす) (bad 〈frustrating〉) 乳房とに分裂(splitting)する母親の乳房」(著作集4,4)であるが、これはHeideggerにおいては、用具的存在者には「せいぜい適性と不適性ということがそなわっているだけ」(SZ上191)であり、適性に良い乳房(取り入れ)、不適性に悪い乳房(投影による迫害対象)が対応する。そして、「最初の対象との関係は取り入れ(introjection)と投影(projection)を含み、「この分裂の結果、愛と憎しみが分離」するのは、「心境的な世界=内=存在が—さまざまな気分によって下地を描かれた—内世界的存在者によって迫られる可能性へ、すでにおのれを託している」(SZ上299)からである。

また、良い乳房には良い母親、悪い乳房には悪い母親が、指示関連によって居合わせている。ほかの人びとの現存在は、本質的な指示関係として、「〈供給者〉が、〈サービスのいい〉人とか〈サービスのわるい〉人とかいう姿で居合わせている」(SZ上358)のである。

(3) 迫害者と「迫られる可能性」

身体的欲求の挫折あるいは欲求不満の状態は、「憎しみと迫害的不安が欲求不満をひき起こす乳房」に向く。「投影が主として母親を傷つけるか支配しようとする乳児の衝動からひき起こされる時、乳児は母親を迫害者(persecutor)として感」(著作集4,8)じ、「自己の暴力的な分裂と過剰な投影は、この過程が向かう人物を迫害者」(著作集4,9)として感じる。これは、「使用的に交渉

する配視」によって、道具の使用不可能性が目立ってくること、不在が発見されていること、用に具わっていないものに気づくことであり、「用具的存在者がある意味でたんなる客体的存在」として発見した結果である（SZ上171-172）。また、配慮された「世界」との交渉において、「不在でも使用不可能」でもなく、「配慮の〈邪魔になる〉」という不用具的なものにも出会う（SZ上172）。「用具的なものが役に立たないとか、手に負えないとか、物騒だとかいうことによって打たれる」のは、存在論的にいえば、用具的存在者の世界適合性が破れ（Kleinでいえば身体的欲求の挫折）、道具連関が途絶え、客体性が発見されている様相を示し、「内=存在そのものが、このようなありさまで内世界的に出会ってくるものによって迫られ」ているからである。加えて、心境が「世界を、たとえば脅迫性を見越」して開示しているからである。つまり、心境的な世界=内=存在が一さまざまな気分によって下地を描かれた—内世界的存在者によって迫られる可能性へ、すでにおのれを託して」いるのである（SZ上299）。このような「目立たしさ、催促がましさ、煩わしさ」など、「客体性」が現れてきても、なお「用具的存在者はまだたんに客体的なものとして眺められ見つめられているのではなく、そこにきざしてくる客体性も、まだ道具の用具性につながれて」いる。そのため、用具的存在者は、「ひとが押しのけたくなる物という意味の道具（厄介物）」となる。このように「押しのけたくなる気を起こさせる」ことのうちに、道具的存在者は、どうにもならない「客体性」において、「なおも手もとに具わっている」ものとして現れてくる。さらに、「使用不可能なものの目立たしさのなかで、いわば別れを告げ」にきて、「用具性は、もういちど現われてくる—そしてまさしくこの告別において、用具的存在者の世界適合性」が現れる（SZ上173-174）。この告別こそ、後に詳述するKleinの「抑うつポジション」の基礎を形成する。

（4）投影性同一視と「開離」

「危険物（排泄物）を自分のなかから追い出し、母親のなかへと追いやろうとするものである。憎悪をもって追放されたこれらの有害な排泄物と共に、自我の分裂排除（split-off）された部分もまた、母親の上に投影されるというよ

りはむしろ、母親のなかに投影」される（著作集4,12）。「これらの排泄物と自己の悪い部分は、対象を傷つけるばかりか、対象を支配し対象を手に入れることにもなる。母親が自己の悪い部分を含み持つ限り、母親は分離した個体として感じられず、むしろその悪い自己」として感じとられる（著作集4,12）。これは、現存在が「この世界＝内＝存在という存在構成に応じて、自己自身を一ひいてはまたおのれの世界＝内＝存在をも一、存在論的には、おのれ自身ではない存在者、おのれの世界の内部で出会ってくる存在者とその存在の側からさしあたり了解」（SZ上141-142）、つまり現存在を世界の側から理解している結果である。現存在は、「自分が居る〈ここ〉を、環境的な〈あそこ〉をもとにして了解している。〈ここ〉は、なにかが客体的に存在するものの〈どこか〉に答えるものではなくて、開離のありさまでなにかに従事している存在の〈なにのもとにか〉に答え、かつそれとともにこの開離を含んでいるものなのである。現存在はその空間性に応じて、まず〈ここ〉に居るのではなく、〈あそこ〉に居るのであり、その〈あそこ〉から自分の〈ここ〉へ立ち帰ってくる」（SZ上239）のである。

ここで排泄物を追いやろうとする母親とは、指示連関によって居合わせている他のひとびとの共同現存在としての「あそこの人」であり、現存在自身が〈あそこ〉にいることから、自己として感じられるのである。

以上、後半においては、投影性同一視をより詳細に考察し、妄想的分裂ポジションを「頹落」、抑うつ的ポジションを「覚悟性」等々、Klein対象関係論のキー概念の存在論的基礎付けを行っていくこととする。

引用・参考文献

M.Heidegger : *Sein und Zeit*, erste hälfte, Max Niemeyer, Verlag, Halle a. d.s./1927.

ハイデガー、マルティン『存在と時間』（上、下）細谷訳、ちくま学芸文庫、1994。
※原文においては、初版本を参考にし、訳文については、細谷訳を用いた。本文中において、「（SZ上頁番号）」、「（SZ下頁番号）」と表記した。

クライン、メラニー、「分裂的機制についての覚書」、『メラニー・クライン著作集-4 妄想的・分裂的世界』所収、小此木敬吾他訳、誠信書房、1985.

※本文中において、「(著作集4、頁番号)」と表記した。